
流星のロックマン 4 ~ Α τ λ α ν τ ?? mystery ~

nasubiboy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4 〈Atlavt? mystery〉

【Nコード】

N4615Z

【作者名】

nasubiboy

【あらすじ】

地球の危機を3度も救ったロックマンこと星河スバル。彼が中学生になるころ事件は起きた・・・WAXA調査隊の謎からすべてが始まる。謎の大陸とは？ 闇の組織の計画とは？ すべての謎が解けた時、組織の計画とムー大陸滅亡の謎が解ける！交錯する想いと運命の中でスバルは世界を救えるのか？

記念すべき(?)なすびの一作品目！（流星シリーズ知ってること前提で書いてますんで宜しく）

ブローグ ～WAXA調査隊～（前書き）

始まりました

駄文ですんません

これから100話目指して頑張ります

ブローグ WAXA調査隊

とある謎の地・・・

「こつこれは！あの大陸の遺跡？」

WAXA調査隊のリーダーは言った。

「リーダーこつこれは大発見ですよ！すぐにWAXAへ連絡を」

「ああ、勿論だ、これは人類史に残る大発見だろう。この大陸の発見は人類の発展にとって・・・」

と、その時・・・

グラグラグラ ドドドドドド！！

「リーダーここ崩れます！はやく退避を ぐ、ぐあー」

「・・・ポセイドン？・・・」

・・・これはスバルが巻き込まれる大事件の序章だった・・・

ブローグ ～WAXA調査隊～（後書き）

・
・
・

感想よろしく

中学校の準備（前書き）

やっと、学校終わりました

中学校の準備

ここはコダマタウン、ロックマンこと星河スバルが暮らしている。

「Z Z Z . . . Z Z Z . . .」

『おいスバル起きろ!!! 今日スピカモールに買い物だろ! ! !』

叫んでいるのはウォーロック。FM星育ちのAM星人だ。

「うーん．．．っは! いま何時?」

『8時半。約束は9時だぞスバル』

「やば〜い! 委員長に怒られる!」

朝ごはん、着替えを風のように済ませ、ギリギリのところでバス停へ。

「スバル君おそいじゃないの。まあいいわ、それよりゴン太よ!」

この女の子は委員長こと白金ルナ。あだ名のとおり小学校では委員長をやっていた。

中学校へ行ってもやるつもりらしい。

「ゴン太君、また牛丼ですかね。朝から牛丼って」

この小人のような少年は最小院キザマロ。マロ辞典を使いこなす

物知り。

「ははは、違くないね」

と、スバルが笑つてるところで奥から走ってくる人影。あれがゴン太、よく食べ、よく遅刻する。

「ごめん委員長。なんせ朝の牛丼が・・・」

「行くわよ。もう！」

と、一行はスピカモールへ中学校で使う物を買いに行くのだった。

そして…スピカモールについた。

「ふひ」。まずは教科書のプログラム取りにいくつよ」

「えっ、まずは牛丼」お黙りゴン太！スバル君の言うとおりにしなさい！」

というわけでプログラムやら、制服やら、靴やら、（ゴン太は牛丼用の紅シヨウガモ）を買った。

「よし買い物終わりね。つぎは・・・」

「委員長！お楽しみのあれですよ」

「そつだぜ！このために朝牛丼食ってきたんだから」

「えっ？なに？なにがあるの？」

「まっまさか！スバル君、ミソラちゃんのライブのチケット持っていない？」

「え~~~~~！今日ライブって聞いてないよ！キザマロ教えてよ」

「スバルはライブなしだな。可哀そうに。」

『ふっドンマイだなスバル』

「うわ~。ブラザーのくせにわすれるなんて。スバル君」

そしてライブ二時間前、スバルだけ帰宅となった・・・

「はあ~。ミソラちゃん怒ってるかな？ライブ来てねーって言われてたし・・・」

『お前が悪いな。まあ帰るしかねーだろ』

とスバルは帰宅することになった

中学校の準備（後書き）

長いかな？まあいいでしょう

ライブ前・・・(前書き)

ふう、連投で あ、後こころ辺戦闘ないんで

ライブ前・・・

バス停にスバルがいた時に電話がきた

「ん？だれだろ？ ブラウズ！」

「すゝばるゝくん！！なんでライブ会場にいないの！来てって言ったよね！」

この女の子こそトップアイドルで「自称戦うアイドル」、響ミソラ。電波変換でハープノートになる。

「ごめん！・・・（忘れてたなんて言えないし、どうしょ？あ、そうだ！）チッチケットが売り切れて てさ・・・」

「はあゝ。スバルくん、忘れてたんでしょ・・・特等席用意してるってメールしたじゃん」

「えっ、じゃあライブ見られるの・・・やったゝ 今すぐ行く」

「今どこにいるの？できれば楽屋に来てほしいんだけど」

「いま、スピカモールのバス停だからすぐ行くよ」

「うんゝ早く来てねゝ」

というわけでスバルもライブを見れることとなった。

そして楽屋。

「失礼します。あ、ミソラちゃん久しぶり！」

「何が久しぶりよ！ライブ忘れてたくせに！」

「（まずい怒ってる）ごめん！ほんとに」

「ふふっ、怒ってないよ♪演技♪」

「え、怒ってないの。（よかった）」

「おい、ミソラ。お前がいるってことは・・・」

「何よ人を悪党扱いして、ウォーロック」

「っげ、出たハープ」

ハープとは、FM星人でミソラのパートナーである。

「スバル君、あと1時間半くらい時間あるし。モールまわんない？」

「いいよ、（ライブ忘れてた貸しがあるし・・・）どこいく？」

「うーんと・・・とりあえずパフェ食べて、それから駄菓子屋に・・・」

デート気分の二人であった。そしてライブ直前まで飛ぶのであった。

ライブ前・・・(後書き)

次はライブですね

ライブ！（前書き）

戦闘しばらくないって言ってたけど 次やる予定だったんでした
すんません

ライブ！

「み〜んな〜！来てくれてありがとう！盛り上がっていくよ〜」

「委員長始まりましたよー！」

「うおー！ー！！！！始まった！！ミソラちゃん！！！」

「ゴン太！うるさい！」

委員長グループは一番前の列。と、言うのもキザマロがチケット発売日前日から店に並んでいたからである。

少し離れて、舞台裏。ここにスバルはいた・・・

「うわ〜。横から見ると違うねー！こんな近くで見られるなんて！」

「そうだな！でも俺は見れないわ・・・」

「なんでロック？」

「いや・・・ハーブが・・・」

「お呼びかしら？いくわよっ」

「いやだ〜！助けてくれスバル！う、ウワ〜」

地球は救えても、ロックを地獄からは救えないスバルであった・・・

•
そんな時・・・

「ドガーン！！！」

「ばっ爆発？ロック行こう、っていないか？」

『おう、いるぜ。逃げてきた』

「んじゃ行くよ、トランスコード003、シューティング・スター・
ロックマン！」

ウェーブロードに行くと、ジャミンガーがいた。

『所詮クズか、久しぶりの戦闘腕になるぜ！』

「ロックはいつも勝手にウイルス撃退してるじゃん！」

『ロックマンとしての戦闘だよ、ひさしぶりなのは！』

「いくよ！ロック」

『おう！』

ライブ！（後書き）

次はジャミンガー戦 余裕です

ライブ再開（前書き）

ジャミングーって流星1しか出てなかった気が・・・

ライブ再開

「ロックバスター！」

ジャミンガーは、不意打ちを食らって大ダメージ、もう瀕死だ。

『スバル、とどめだ！』

「うん。バトルカード、キャノン！」

ジャミンガーはなぜか反撃もせず、ニタツと笑ってデリートされた・・・

「ふう、終わったね」

と、そんな時スバルは周りが見えてなかった・・・

『おい、スバル。お前にしては珍しく目立ちたがったか？ふう』

「えっ？」

そう、スバルはライブのステージのど真ん中で戦闘をしていたのだ。ライブはミソラだけでも

パニックなのに、ロックマンの登場でさらに大変なことに・・・

「~~~~~！！！！世界を救ったヒーローとミソラちゃんの共演だ！！！！」

「うっ！まずい、ロックどうしようっ？」

『しらねーな、そのまま目立っとけ』

「えゝ！僕、目立つの嫌いだって・・・」

そんなヒーローの心情なんて関係なく、ライブはさらに盛り上がっていく。

「みんなゝ！今日は世界を救ったヒーローも来てくれたし、最後の曲は一緒に行くよゝ」

ミソラはロックマンにウィンクした。

「（はゝ・・・一緒につて何すればいいの？）」

「それじゃー行くよー」シューティングスター！

「ゝゝゝワゝ！！！！！！」

「ウェーブロード 広い世界 夜空見上げ 一人ぼっち キズナ探して ただ 彷徨う」

ウソに怯え 逃げ続けて 孤独にさえ 気がつかずに ただ 歌い続けていたの

星の光が 輝く 私の ココロに 降り注ぐ そして あなたと 巡り合えたんだ

Our band was discovered then

震えて 泣いていた 私を 見つけてくれたね シューティング・スター 暗闇 照らし 駆けてく

その 笑顔に チカラ もらうんだ 怖いものなんか何もない
振り返らない ずっと 前を見て 光 掴む キミの 笑顔 そ
れが 私の ハートなんだよ

シューティング・スター 暗闇 照らし 駆けてく」

会場は最高潮に盛り上がって幕を閉じたのであった・・・そして
ライブ終了後。

「委員長グループ」

「なんでスバル君が出てきたのですかね、マロ辞典にも載ってない
ですよ」

「そんなことより、駄菓子屋行こうぜ委員長。腹が減った」

「マロ辞典とやらに載ってるわけじゃないの、あとゴン太、駄
菓子屋にはいかないで帰るわよ」

「えゝ、いけないのかよ」

「いくわよっ!」

という感じでコダマタウンへ帰って行った委員長グループだった。

ライブ再開（後書き）

次はスバル視点で

ライブ後（前書き）

ライブ後ですね

ライブ後

くスバル&ミソラく

「ふう、まさかステージのど真ん中に自分がいたとは・・・恥ずかしいよロック」

『仕方ねーだろ　ツクツク、俺は目立ててよかったぜ』

「まあロックはそうだけど・・・」

と、舞台裏でそんな会話をしていると

「ス〜バル〜くん　かつこよかったよ」

ライブが終わってすぐなので、ライブ衣装のまま走ってきた。

「あ、ミソラちゃん　おつかれ」

「うん、スバル君のおかげでジャミンガーに邪魔されずに大成功のライブだったよ」

「んじゃ、僕かえ「ちょっと、このあと楽屋に来てくれない？」」

「あ、うん　いいよ。んじゃ先行ってるね」

「うん　すぐ行く」(今日絶対言いつて決めてたんだから　ファイトよミソラ)」

『ふふっ、今日こそ伝えるんでしょ ミソラ』

「うん・・・ライブよりドキドキするな・・・」

『だいじょうぶよ ミソラなら』

「でっでも、もしスバル君が私のこと嫌いなら・・・まっまたは、委員長のことを好きとか・・・」

と、一人で緊張しているミソラと何も知らないスバルであった。

ライブ後（後書き）

次は告白・・・と言いたいんですが邪魔が入ります

告白・・・失敗・・・（前書き）

どんどん進めたいんだけどなー

告白・・・失敗・・・

〔楽屋内〕

「ミソラちゃん遅いな　なんか話あんのかな」

スバルは広めの楽屋にポツンと一人でいた

「なんだろう？いつもより顔が赤かったような・・・」

『ふんっ、俺はわかったぜ、名探偵の俺の推理では・・・ずばり！』

「ずばり？なに」

『ズバリ・・・あいつは・・・「ガチャ！」』

「はあはあ・・・スバル君待った？マスコミとマネージャーに追われて」

「いや、大丈夫だよ、んでなんの話？」

「あつあのさ、すっスバル君で・・・好きな人いる？・・・」

ここでスバルは少し今回の話を感じずく、ミソラは顔が真っ赤だ

「いついるよ（まさか・・・この展開は）」

「あのさ、わたしスバル君のことが・・・「ガチャ！！！！ミソラいるか？」」

マネージャーが駆け込んできた、そして

「おいミソラ、ドラマの撮影の時間だぞ！急いで準備しろ！」

「・・・うん（せつかくいいところだったのに）」

「んじゃ、ミソラちゃん 僕は行くね（まさかな）ミソラちゃんが
僕のこと・・・」

『いくか スバル』

と、雰囲気ぶち壊して今回は終わってしまうのだった。

告白・・・失敗・・・（後書き）

マネージャー出てきちゃって台無しですわ

暁の呼び出し（前書き）

冬休みに入る前に10話こえたい！

暁の呼び出し

あのあと、スバルは帰宅した。

そして春休みも終わり・・・入学式前日

「あ、暁さんからメールだ、なにになに・・・」

「おう、久しぶりに送ったぞスバル、ちょっと明日来てくれないか？学校には一週間休むってことで」

「え、なんだろう？学校休むまでってことは大事なことかな」

『まあ 行くしかねーだろ』

スバルはこのことを母に伝え許可をもらって入学式から一週間休むこととなった

「謎の大陸」

「ポセイドン様、地球で何か動きが・・・」

「まったく、小賢しい・・・」

「先の探索隊と関係があるのでしょうか？」

「あるとしたら、ぶちのめすだけだ」

と言い残しポセイドンは奥の間へきえていった・・・

暁の呼び出し（後書き）

なぞですな

「・・・ポセイドン・・・」(前書き)

なぞめいています

「・・・ポセイドン・・・」

↳ WAXA 本部

「ここひさしぶりだね　あの事件以来か・・・」

『おう、また事件が起きりや暴れられるぜ!』

「いや、平和な方が僕はいいんだけど・・・」

そして中に入る二人であつた。

「暁さん!久しぶりです」

「おう、サクサクサク、ひさ、サクサクしぶりだなサクサクサク」

「はい、けがは治ったのですか?」

「おう!このとおり元気だ」

うまい棒を食べ終わった暁は答えた。

『あいつは元気なのか?』

『久しぶりですねロック・・・ちゃん』

アシッドはヨイリー博士のようにしてロックをからかう

『てめー　ぶっ殺すぞ!』

ロックはやはり好戦的なのであった。

「それで、暁さんなんの用事で？」

「ああ、ちよつと司令室まで来てくれ」

〈司令室〉

「この音声を聞いてくれ・・・」

〈ザ〉・・・アト・・・ス・・・の・・・ポセイドン？・・・
・ザザ〉

「なんですかこれ？ポセイドン？」

「ああ、俺たちもわからん、この調査隊はWAXAだっていつても独立してた調査隊だからな」

「独立ってどういうことですか」

「WAXAのなかで、何かを研究してた部隊らしいんだが・・・何をやってたか上に報告してなかったらしい」

〈ポセイドン〉という言葉しかわからない暁&スバルは調査を進めた

「でも、暁さんなんでぶくがこの調査に？」

「それは・・・ヒーローだから、じゃだめかな？」

『（暁のヤロー、何か隠してやがる）』

「まあ、いいですけど・・・」

そして、通信の発信源やら、調査隊の部屋を片っ端から調べたが・

「部屋からは何も出なかったそうですよ、暁さん通信は？」

「サクサクサク、今ヨイリー博士が調査中だ」

「シドウちゃん、あ、それからスバルちゃんちよつときて」

ヨイリー博士に呼ばれて行ってみると・・・

「この調査隊はね、通信の発信源をつかませないために鍵をかけてるの」

「いったいなんのために？」

「わからないけど・・・今からじゃもうこの事件は迷宮入りってことね」

「サクサクサクそうですかサクサク」

この調査で一週間経ってしまったのでスバルは調査メンバーから外れた

「シドウちゃん、スバルちゃんがまた地球を救ってくれると？」

「はい、彼は俺が認めたヒーローなんで・・・」

「あの大陸の力は強大だけど・・・スバルちゃんを巻き込むつもり？」

「彼の力がなければ・・・あの大陸とその裏で動いてる組織には勝てないと思ってますんで」

何か知っている二人はまた調査を始めた・・・

「闇の組織」

「Y、次の計画へ移ろう・・・これが私の計画の一步だ」

「ふふふふ、俺は殺しができりゃいいんだけどな」

「まあそう言っとな、まだお前は動かん。トート、ハイドとやらを呼んで計画をやらせろ」

「はっ、Z様了解です」

「おいブラック・・・いやZよ なぜそこまでしてロックマンとやらを狙うんだ」

・・・
この暗い部屋で光っている画面にはスバルとミソラのデータが・

「ふっ、計画は100%の成功率に成るよくに邪魔者は消すもんだよ・・・」

「卑怯な手を使ってもか？」

「そうにきまっている！」

「ふん、まあ俺には関係ないか・・・」

そしてＹと呼ばれる男は闇へ消えた・・・

「・・・ポセイドン・・・」(後書き)

闇の組織ってなんでしょう？
感想待ってまゝす！

中学校初登校（前書き）

中学校に・・・

「あらスバル君、久しぶり。」

「スバル君、委員長はまた委員長になりましたよ」

「そうか・・・あれゴン太は？」

「おうスバル今来たぜ！」

と、一週間ぶりに委員長メンバーと話すスバルだった。そしてチャイムが鳴りみんな座った

「あれ、僕の横ってだれ？」

「スバル君知らないんですか、この席は・・・」ガラガラ」

「おーい、みんなー席についてるか？」

とは言ってきたのはどこにでもいそうなふつーの先生（先生たちはストーリーにあまり出ません）

「お、あいつはまた遅刻かーんじゃ出欠取るぞーあ、その前にスバル自己紹介しろ」

「はっハイ」

前に出るスバル

「えーっと、星河スバルです。よろしくおねが」ガラガラガラ、バン！」

「すいませ〜ん、遅れました♪あっ！すばるくん！」

と遅れてきたのはミソラだった、スバルは超びっくり&他のクラスメートは落ち着いている

「早く席につけ、まったくアイドルだからっていつも遅刻とは・・・」

そしてスバルの自己紹介もおわり、席に着いた

「ミソラちゃんがこの学校なんて聞いてないよ、キ〜ザ〜マ〜ロ！」

「なっ、僕のせいですか。マロ辞典には前から載ってましたよ」

「ま、いいじゃないの二人とも。宜しくねスバル君♪」

クラスメートの何人かはなぜスバルがミソラと知り合いなのか分からず、他の生徒はスバルがロックマンだからだと知っていた

・・・そして帰りのホームルームが終わった

『帰ろうぜスバル！』

「うん、ん？メールだ・・・ミソラちゃんからだ」

☆放課後展望台に来て、この前伝えたかったこと言うから・・・☆

スバルは顔が赤くなった、とうのミソラはというと

「はい、ちょっと待って、今サインするからはいはいおさな〜い」

生徒からのサイン要求で忙しそうだった

「んじゃ、先に行くかロック」

『おう！』

展望台へ向かったのだった・・・

中学校初登校（後書き）

王道を少しいじくってみました（ふつうはミソラが転校生だったの
で）

次は告白です 上手く書けるかな？

告白のまえ（前書き）

ついに十話こえたか

告白のまえ

く展望台く

「ミソラちゃん、まだかな」

かれこれ1時間待っているスバル

『まあ、あいつもアイドルだしな』

「ロック、この前・・・ズバリ！って言ってたけどミソラちゃんの話ってなんのことかなー？」

『ああ、ズバリ・・・新発売のうまい棒の話だろう』

ドヤ顔をするロックを引いた目で見るスバルはどうすればいいのかわからなかった

「そっそうなのかな？（まさか、ここまでロックが鈍感とは）」

『おう、なんなら俺を名探偵って呼んでくれてもいいんだぜ』

『んじゃ、行きましょうかKY探偵』

『つげ、ハープーいやだ』

さうようならロックとばかりに手を振るスバルだった

告白のまえ（後書き）

次こそは告白、ってかロックばかすぎやろ！

告白（前書き）

やっとかゝつかれたわ

告白

くスバル視点く 3 時間後（待ち合わせ時間から4 時間半）

ロックがいなくなっただけからすこしたったが、ミソラはまだ来なかった・・・

「ハーブが来たからすぐ来ると思ったんだけどな・・・」

「うう、さむつ。ハッハクション・・・まだかな」

すっかり暗くなり、夜空には星が輝きだした・・・

「母さんに遅くなるってメールしておこう・・・」

スバルはドキドキしながらミソラを待っていた

くミソラ視点く

「うっわー！！！！やーばーい！！！！」

全力でダッシュするミソラ、なんとあの後マネージャーに呼び出されて・・・

「スバル君怒ってるかな・・・このままじゃ・・・」

電波変換したいとこだが、ハーブにロックの面倒を任せたためできなかった

「ぐすつ（スバル君に告白するときに泣いててどうするんだ・・・）」

涙をこすってやっと展望台へ着いた

「（あ、スバル君待っていてくれてる）」

（通常視点（スバル視点））

「あっ！ミソラちゃん！」

「ごめんスバル君こんなじかんまで・・・（おこって・・・ない？）」

「（ちょっと意地悪してみるか・・・）遅い！」

「（まずい）ごめん！ほんとにごめん！！！！」

「ふふふ、おこってないよ・・・んでなに？」

「あっ、あのさスバル君、わっ私とさ・・・」待って！！！！」「？」

「ぼっ僕から言っよ・・・」

「（えっ？）」

「ミソラちゃん！前から・・・前から好きでした・・・僕と、付き合って下さい！」

「私こそ、好きでした・・・よろしくお願いします」

そう言ったミソラは涙目だった、

「んじゃ、夜遅くだし帰ろうよ」

「ぐすっ、うん・・・」

「（泣いてる？）明日また学校で逢おうね」

「ふふっ、明日は土曜日だよ。でもさ、うちこない？スバル君来たことないし・・・」

「ベイサイドシティーだっけ？」

「うん、スバル君の家に迎えに行くから、んじゃね」

「うん」

家に帰る時二人は顔が真っ赤だったとさ・・・

告白（後書き）

今日はここまで・・かな 次も書きたいんだけどな
感想まっています！

ミソラの家に行く朝（前書き）

視点が入れ替わるのに注意

ミソラの家に行く朝

「スバルの家」

「……………」

『ZZZ・・・ZZZ・・・』

昨日からドキドキして眠れていないスバル、今は時刻4時

「ふう、寝れないしテレビでも見てるか・・・」

一階に降りると土曜日でも朝早く起きている大吾&あかね

「あらスバル今日は早いのね」

「おう、スバル・・・スバルの顔も見れたし行くか！それじゃあ、あかね」

「「いつてらっしょい」」

大吾はいつも4時出勤していたのをはじめて知ったスバルであった

「（こんな朝早いんだね父さん・・・）」

早めの朝ごはんを食べてふと思ったスバル。と、そこにあかねが

「んで、どうなのミソラちゃんとは？」

「ブっ！！！！（なんで！！？）」

お茶を吹いてしまうスバル、面白そうにあかねは続ける

「あら、凶星だった？」

「（ホントは知ってたくせに）」

顔を真っ赤にしててれるスバル、パンを口に詰め込み、逃げるように部屋へ行った

「ふふっ、スバルも大きくなったわね。前はあんなに小さかったのに」

嬉しそうなあかねだった

くミソラ宅く

「（ハープは寝てるみたい）・・・」

『起きてるわよミソラ、寝れなかったんでしょ』

「うん・・・」

今は朝4時半、まだ約束の9時には遠い

「メールしてみるかな、起きたら返信してって（早く来ればいいな）」

そして朝早くにメールをしてご飯を食べた

くスバルの家く

「あ、メールだ・・・なにになに？」

くスバル君、起きたら返信してねくすぐ行くからくく

「うん・・・（いましたら迷惑かな？）一応しとくか」

そして着替えなどを済ませていくスバルだった

くミソラ宅く

ミソラは朝ごはん（シリアル）を食べていた

「ん！スバル君今日早いんだね！早く行かなきゃ」

山のようなシリアルを一気に口に含んで、いつもの服に着替えてスバルの家へ向かった

くスバルの家く

そして5時になった

「まだ5時ってテレビショッピングやってるんだね・・・」

テレビでは高圧洗浄機のマテリアルウェーブを紹介していた

『おい、これセットで15000ゼニだったってよスバル！！！！買おうぜ』

いいカモのロックを冷たい声で返事をするスバル

「はあ、ロック高圧洗浄機って何に使うのさ・・・いらないでしょ」

『でつでも・・・あの値段で・・・「ピンポン」』

「あ、ミソラちゃん来たかな？」

ドアを開けると眠そうなミソラが今できる満面の笑みをした

「おはようスバル君」いこつか？」

「うん、母さん行ってくるよ」！

「はい、行つてらっしゃい」

そしてベイサイドシティのミソラの家に行くのであった

く謎の大陸く

「ポセイドン様、ムーの生き残りとやらが来ました」

「そうか・・・通せ！」

「しかし・・・」

奥から白い髪少年が来た、

「ふん、貴様がポセイドンか。オリハルコンはどこだ」

「答える義理もないわい、用事はそれだけか」

「ああ、教えないならこんど奪いに来る・・・」

「はははっ！おぬしごときに奪えるかな？」

「ふんっ」

そして白い髪少年は去っていった

「ポセイドン様なぜあの男を通したの？」

「・・・いや、やつは何か組織について知っているかと思ったのじやが・・・」

「闇の組織」

「ハイドとやらをロックマンの元へ向かわせとけ」

「Z様・・・やつは弱いから勝てぬぞ・・・」

「トート・・・いや？、やつにはロックマンのデーターを取ってもらう」

「所詮は捨て駒っつか、ブラックよ」

「Yいつの間に？まあいい準備させておけ」

「はっ
」

「(さてロックマンどうでるかな)
」

そしてまた闇に消えた・・・

ミソラの家に行く朝（後書き）

次もすぐ書きたいな

ミソラ宅（前書き）

明日から学校か・・・

ミソラ宅

くベイサイドシティミソラ宅前く

「うわー・・・でつかくない」

ミソラの家は超高層ビルの一室だった

「よし、入ろうスバル君」

ガードウィザードに暗証番号を確認してもらい中へ入った

「ホテルみたい・・・（ミソラちゃんはやっぱりトップアイドルなんだよな・・・）」

「んじゃ、うちの部屋行こう」

くミソラの部屋く

「・・・（ピンクばっかだなー女の子の部屋ってこんな感じなのか？）」

ミソラの部屋はピンクを基調とした部屋だった、

「どうかな？」

「あ、うん（何て言えばいいんだ？）」

返答に困っているスバル、とそこで

『ふふふっ、スバル君照れちゃって』

「いっいや照れてないよ・・・」

顔を赤くするスバル

「飲み物持ってくるねっ」

ミソラは飲み物を取りに行った

『ケッ、俺は来る意味なかったかもな』

「そう言わないでよロック、ほらハーブもいるんだしさ」

『スバル、俺は地獄に行きたくないぜ・・・（何か電波を感じる・・・）』

『それじゃあ、今日は天国にいきましょうか』

そんな感じ？でロックは連れて行かれたのであった

「スーパール君、飲み物持ってきたよっ」

飲み物（紅茶）を飲みながら楽しそうに会話をする二人だった・・・

「ふふふっ、私の脚本が出来上がったぞロックマン」

二人に危機が迫っているとはまだ誰も知らなかった・・・

ミソラ宅（後書き）

ハイドが次出ます

ファントムブリック現る（前書き）

ハイドってじつこいですよね

ファントムブラック現る

くロック&ハープ

『おい・・・どう思うこれ?』

『状況は最悪ね、早く二人に知らせなきゃ』

二人の周りには大量のウイルスがいた、軽く200匹は超えるだろう

『(この電波、ハイドじゃないか?) おい、お前はおかしな電波を感じないか?』

『うん、前に会ったことがあるような気がするわ』

二人は急いでスバル&ミソラのもとへ向かった

くスバル&ミソラ

「ところでなんでミソラちゃんはコダマタウンの中学校来たの?」

「えっ! (スバル君がいるからだよ) いや、こっちの中学校は私立だしさ・・・」

「へえ」 (まさか僕がいるからはないよな) 「

そんな会話をしているときにロックたちが到着

『おい！スバル！ウイルスが大量発生してるぞ』

「え！分かった行こう、トランスコード003、シューティング・スター・ロックマン」

「ハープ私たちも行こう トランスコード004 ハープ・ノート」
（ホテル玄関）

「いくよ、ハープ・ノート！ キャノン プラズマガン」

両手を銃に変えどんどんメットリオを倒していく

「ハープ私たちも行くよ ショックノート」

二人は5分もしないうちに200匹ぐらいのウイルスを全滅にした、が・・・

『おいスバル、あいつだ！ハイドの野郎だ！』

「ふふふっ・・・ロックマンいいアドリブだ、しかしこの主役がお前を倒す」

「こい！ハイド！ミソラちゃんさがってて」

「うん（スバル君なら勝ってくれるよね）」

「行こうロック」

『おう 腕になるぜ』

「ふふふ勝てるのかな？ ロックマン・・・」

そしてハイド戦が幕を開ける中・・・

「ハイドのやつ、俺の命令を破りやがって・・・死刑判決だな」

闇の組織の幹部、Yというローブを被った男は遠くでそうつぶやいた。彼の手には人形劇などで使う道具が握られていた・・・

ファントムブラック現る（後書き）

Yはこのストーリーで重要なんで忘れないで覚えておいてください

ファントムブラック戦（前書き）

眠いっすな

ファントムブラック戦

「ミソラのマンションの玄関フロア」

「バトルカード ロングソード！」

「フフフハハハ！ファントムクロー」

お互い一步も譲らぬ二人、しかしブラックには余裕がなくギリギリといったところだ

「くそ！もう一回だファントムクロー！」

ブラックが仕掛けたがロックマンはすぐにかわす

「エドギリブレード！ ワイドソード！」

今度はロックマンから攻める、2刀流の連続攻撃だ

「くそ・・・」

流石にブラックも受け切れずくらってしまっ

「まだだー！！！」

しかし打たれずよく再び攻撃を仕掛けてくる

「ロック！らちが明かないけど、ノイズチェンジできないしどうする？」

『このまま続けりゃ、そのうちすきを突いて勝てるだろ』

二つの影はまた衝突し、それを一人ポツンと見守るミソラ

「スバル君ならきつと勝てるよね」

『負けるわけじゃないの』

「わたしの・・・私の脚本は完璧だ――！！！」

「僕だつて負けるわけにはいかないんだ！バトルカード インパクトキャノン！」

インパクトキャノンを打たれたブラックは飛ばされ、二人の間に距離ができる

「私は負けない！！！！ファントムスラッシュ！！！」

『来るぞスバル！』

「うん！これで最後だ！」

ズバツとファントムスラッシュがロックマンを切ったと思いきや・・・

「バトルカード ヘンゲノジュツ 終わりだハイド！！！」

「なにっ！ぐっ・・・」

ブラックは負けてうずくまる、

「ミソラちゃん終わったよ・・・帰ろう」

「うん」

二人が帰ろうとしてる時ブラックは

「くそ・・・私の脚本は・・・かん・・・」

電波変換を解かれたハイドは、マンションのまえで倒れていた

「見苦しいなハイドよ」

ロープをはおり、十字架の仮面の男は言った

「なっ、マドロー・・・様、なぜここへ」

「おい、俺の取ってこいといった品は・・・」

「（まずい忘れてた・・・くそっ）次は必ず取って「バン！」」

「お前は用済み・・・でもまだ使えるな」

というマドローという男はハイドの髪を一本ぬきとった

「ぐっ、何をする」

「ふっ、人形劇を始めるだけだよハイド君・・・」

男はほほ笑んだそして、糸のようなものを巧みに動かしていく

「まっまさか、それは・・・」

ハイドは無理矢理操られ電波変換させられる、そして、人形劇の人形のようにぎこちなくミソラの部屋へ向かわされて行った・・・

「第二ラウンドだロックマンよ・・・」

ファントムブリック戦（後書き）

マドーラ怖し・・・マドーラ＝Yです

人形劇の始まり始まり（前書き）

・・・（書くことない）・・・

人形劇の始まり始まり

「ミソラの部屋」

「玄関だいぶ壊しちゃったね・・・」

「大丈夫だよ、ロックマンは世界を救ったヒーローなんだから」

照れるスバル、しかしこの時この部屋いやビル自体が大変なことになるとは思ってもいなかった

「スバル君いつ帰るの？暗くなってきたけど・・・」

「えっ、早く帰った方がいい？」

「え、うん、いやスバル君のお母さんも心配してるかなって（時間言わなきゃよかった・・・そうしたらスバル君ともっと一緒に入れたのに・・・）」

「大丈夫だよそこは、なんか母さん機嫌よくてメールにこんなこと書いてきたし」

「スバルへ もしよかったら今日はミソラちゃんの家泊まってくれば？今日は結婚記念日だから、大吾さんと二人で食事に行くつもりだったから それに付き合ってる二人の時間を邪魔するわけにもいかないしね あかね」

「・・・（スバル君と二人きりの夜・・・うれしい）」

「あ、でも迷惑だよね・・・そのうち帰るよ」

「いっいや、私も独り暮らしでさみしいし泊って行ってもいいよ・・・」

「（うそだろっ！母さんの冗談が現実！？）でっでも・・・」

顔を赤くする二人、いい雰囲気になってきたところへやつは来る・・・

『（ん？ハイド？）おいスバルハイドの電波がする・・・』

『全くあんたは空気読めないの？（でも確かに・・・）』

その時！

「ガッシャーン！！！」

「スバル君後ろ！」

後ろを振り向くとガラスを割ったハイドが宙に浮いていた、しかし何かおかしい・・・

「ハイド！いや、ファントムブラック勝負はついたはずだ！」

「ぐっ（クソこのままでは死んでしまう）た・・・すけて・・・くれ」

「えっ？なんで苦しそうな、スバル君なんかした？」

「いや、何もしてない・・・」

ブラックはその時操られるようにして、苦しみながら攻撃してきた

「ロック！なんかおかしいけどやろう！ ロックバスター」

直撃だった、普通ならここで倒れる、はずだが

「（ぐっ、まずいこのままでは俺ごと爆発する）ロックマン・・・
聞け、がふっ」

「なに？（おかしいぞ何か）」

とブラックは身を覆っているマントをとった、そこには時限爆弾が・・・

「こいつが・・・爆発する前に俺についてる・・・電波の糸を切れ・・・」

血を吹きながらブラックは言った

「ロック電波の系ってなに？」

『こつちの世界でいうピアノ線見てーなやつだ』

「どこを切ればいいの？」

『わかんねーよ俺は』

そんなやり取りをしていると時限爆弾爆発まで残り1分になる

「まずい！ミソラちゃん！このマンションの人を全員避難させて」

「スバル君は……」

「僕はこれを取り外す努力をしてみる、腐れ縁だけどこの人を見捨てられない……」

「スバル君……（何て優しい）……わかった」頑張っ、ムチャしないでね」

『ケツ、こんなやつをなんで救わねーといけないんだよ！』

「僕にも分ないけど……助けを求める人がいたら救うべきじゃないのかな」

「クツ、貸しが一つできたな……ロックマン……俺の、俺の頭上を切ってくれ」

「わかった、ソード！ えい！」

電波の系は簡単に切れた、しかしここで問題が発生する

「クソっ、この時限爆弾が取れない……」

『どうすんだスバル、残り30秒切ってるぞ！』

「わかってる、……あつ、コードが二つある……これって」

『よくあるパターン！どちらかを切る……赤と緑か……』

赤いコードと緑のコードを目の前に悩むスバル

「一か八か、僕は緑を切る！！！ウォー バトルカード ソードフ
アイター！」

時間は残り3秒を切っていた・・・そして緑のコードを切った

「頼む！！まだ死ねないんだ！！！」

「（ここでスバルを守れなかったら大吾に合わせる顔がない・・・）
」

「（気絶中）」

しかし運命とは無情なものである・・・

「ピー！爆破コード切断確認、5秒後爆発します！」

「まずい！！！！どうしようロック？・・・いい人生だった」

「バッキヤロウ！！！！スバル！！！！死ぬな！！！！」

「（気絶につき無言）」

とここでハイドから爆弾が外れた、おそらくコードを切ったから
だろう・・・

「ロック・・・ありがとう今まで・・・・・・・・・・・・・・・・」

「スバル・・・」

人形劇の始まり始まり（後書き）

続く
…

爆発の傷跡（前書き）

早く寝たい・・・これ書いたら寝る

爆発の傷跡

（ミソラ視点）

ビルのまえで祈っているミソラに最悪の光景が・・・

「ドカーン！！！！ガラガラ！！！！」

なんとこうすビルそのものが崩れ去ってしまった、スバルは爆心地の中心だったろう

「（スバル君ひどいよ・・・私一人残して死ぬなんて・・・）ぐすつ・・・」

『ミソラ・・・（ロックも死んじゃったわね・・・）』

そんな時マンションの住民たちはひとつの方向に指をさして叫んだ

「「「「「ロックマンだ！！！！」」」」」

そこにはハイドを抱きかかえ帰ってくるヒーローの姿があった

「（スバル君！）ぐすつ、うつ・・・」

ミソラはその場にへたり込んだ、スバルにもしものことがあったらと思ったからだ

「スバル君！・・・ぐすつ」

降りてきたヒーローに抱きついたミソラ、

「約束は守るよミソラちゃん、絶対に！」

「しかしスバル、よくあんな状況で頭が回ったな・・・」

（回想（爆発の瞬間））

「ロックありがとう今まで・・・」

「えんぎでもねーこと言うな」

「いや、最後まで聞いて・・・そしてこれからも宜しく！ バトルカードスーパバリア！」

「スバル・・・その手があったか」

「うん・・・でも、僕はダメージを少しはくらったよ」

「なんで？」

とロックが言うとスバルはバリアをハイドにかけ自分はガードした

「ムチャしゃがる・・・」

（通常視点）

ロックがそのことを説明しているとスバルは電波変換が解け倒れてしまった、みると全身傷や火傷だらけだった

「スバル君！目を開けて！お願い！（いやっ、こんなお別れ・・・）」

「大丈夫だよ・・・それよりハイドは？」

『消えた・・・さっきまでいたんだがどこかへ姿をくらましたな』

「そう・・・か・・・無事・・・だったみ・・・たいだ・・・ね・・・」

「スバル君！！！！ぐすっ、いやだよこんなの・・・」

『早く起きやがれスバル！おい！』

「ハーブ！救急車を・・・いや電波変換よ、私が運ぶ！」

『わかったわ、ミソラ！』

そうしてミソラの家は全壊^{マシヨ}、だが何とかスバルは一命を取り留めたのであった・・・

「ふふふ、こうこなくっちゃね。次はどうしよっかな？・・・響ミソラ・・・彼女を使うか・・・」

マドローはそう言うと、ミソラの写真を見てにたつくのであった

「この貸しは必ず返すのが、私の新しい脚本かな・・・ぐっ」

ハイドは、大けがをしながら闇に消えたのだった

爆発の傷跡（後書き）

ハイドはいちちじてきにいいやつ（？）になるのかね？
マドーラは怖いっすねー

んじゃまた明日更新予定です

感想待ってるよ¥（owo）／

奴は目覚めた・・・（前書き）

疲れた学校

奴は目覚めた・・・

とある病院

「・・・・・・・・ZZZ・・・・・・・・」

『まだ起きねーのかスバル・・・』

あれから六日もたっていた、生きてはいるのだが目を覚まさないスバル

『つつたく、ハイドなんて救う意味あったのか？』

「・・・・・・・・」

『はあ・・・返事もねーし・・・暇だな』

学校

今は昼休み、ミソラはというと・・・

「ねえ、何か知ってるでしょ・・・スバル君のこと」

委員長が問い詰めるとミソラは聞こえないふりをする、しかし委員長はあきらめない

「六日も腹痛っておかしいじゃないの、それにあなたまで元気ないし」

「（ここは言うべきかな）スバル君は・・・けがしてるんだよ・・・大けが・・・」

「何があつたんだよスバルに？」

ゴン太も気になるようだ、

「ミソラちゃん・・・本当のことを話して下さいよ、スバル君のこ
と僕たちだって心配なんですから」

キザマロも言ってくる

「大丈夫だよ・・・来週には来るって・・・」

そう言うミソラの目には光がない、これに感づかないほど委員長
は甘くない、が

「（スバル君のことだし、ムチャしただけよね）まあいいわ、行く
わよキザマロ、ゴン太」

何とかしのいでいたミソラ、しかしスバルが目覚めないのは心配
だった

「（スバル君・・・大丈夫って言ったよね）・・・」

『（相当心配みたいね）大丈夫よミソラ』

こんな時励ますのがハープの役目

「うん・・・帰りにまた病院行ってみるね」

なんとか元気を取り戻すミソラだった

〈病院〉

「……………（ん？ここはどこだ）ロック？いる？」

『フンッ、ようやくお目覚めか……………』

「どれくらいたったの、あれから？」

『六日……………心配してたぞ……………ミソラが』

「ロックじゃないんだ！そこは心配してよ！」

急に元気になるロック&スバルコンビ

「でも心配かけたな、メールして……………今何時？」

『ざっと、1時だな……………学校は昼休みの時間じゃねーか』

「それなら電話しろ！ブラウズ」

〈学校屋上〉

「ふう！ここは気持ちーね」

中学校にも屋上があり、小学校より大きく芝生が生えている

『ミソラ電話よ、誰かしら？』

「ん？えっ、スバル君？ ブラウズ！」

映ったスバルの顔は凄く久しぶりだった

「ごめんミソラちゃん、心配かけて」

「ほんっつと！心配したんだから・・・もうムチャしないで・・・」

「うん（ミソラちゃんを守るためならまたしちゃうな・・・）」

「学校終わったらそっちに行くからっ」

『ミソラ、今日からずっとドラマの撮影よ』

「うーっ・・・ごめんスバル君・・・」

「いいよ、気にしないで」

「（なんて優しい）委員長たちは行くと思うから、私は今度ねっ」

「うん！んじゃ、頑張ってね」

（放課後・病院）

「スバル君、心配したじゃないの・・・何があったの？」

「おいスバル、何があったんだ？」

「スバル君、僕も心配してたんですよ・・・」

「みんな・・・（みんな心配してくれてたんだ・・・）」

そして、スバルはみんなに説明をして、そのあとは学校のことなどで話し込んだ

「そう言えばスバル君、来週は体育祭よ・・・あなたにも出番はあるからね」

「もうそんな時期か・・・」

そう言ったスバルに対し、三人はニヤニヤしている

「（なんだろう？）」

そんな時、

「ガチャ！ふう、スバル君！来ちゃった♪」

ミソラが駆け込んできた、そして「てへっ」とやっている

「うつ・・・（可愛い）」

「それじゃあみんな揃ったところで帰りましょう」

5人は帰ることに、ちなみにスバルはもう傷が治り、退院できる状態だった

↓帰宅時・コダマタウン↓

「それじゃあ、みんな月曜日ね、遅刻しないでね」

「ゴン太君行きましょうか、スバル君、ミソラちゃんさようなら」

「おう、スバル、ミソラちゃん、じゃあな」

「あれ・・・ミソラちゃんベイサイドシティに行かないの？」

「マンション壊れたし・・・」

「じゃあ、どこ住むの？」

というと急に、ミソラは笑顔になって

「ついてきて、びっくりするから」

「（なんだろ？）」

と、ミソラに引つ張られて進むとだんだんスバルの家が近づく

「（まさか！？）」

スバルの脳内はある一つの考えへ・・・

「ここが私の家、よろしくねスバル君」

「えええええつつつつ！！ほんとに？」

「ほんとだよ、ビルが爆発してから居させてもらってるよ」

「（まじかいな）そうなの・・・じゃあ入ろうか」

「うん」

内心は嬉しいスバルであった

奴は目覚めた・・・（後書き）

変なところで切ってますんません

一回サブタイトル打ってなくてやり直した・・・

疲労困憊だわ

感想待ってます・・・

あと、良い文章のアドバイスも！

来週までに・・・（前書き）

学校が冬休みになるまで、一日一話ペースかも、すみません
さらに駄文・・・救いようがない作者
見てくれる人に感謝です

来週までに・・・

↓スバルの部屋↓

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

スバルは思うのだった・・・無理と

「（来週までに・・・って無理すぎるよ）」

なぜスバルこんな感じかというと・・・

↓1時間前・スバルの家・夜ご飯の時間↓

「「「いただきます」」」

スバル家にミソラが加わり、夕食時の話も盛り上がった

「スバル、ミソラとどうなのよ？」

照れるスバル、まだこの時は退院から間もなくテンションも高かった

「別に・・・（母さんなんでめっちゃ嬉しそうに聞いてくんの？）」

まあ、あかねもスバルいじりはこのくらいにしといて、話題が変わる

「そう言えばスバル、ミソラ、来週の体育祭絶対見に行くからね」

「私も頑張るぞ♪あ、そう言えばスバル君に伝えてなかった・・・」

「なに？伝えてなかったことって？」

スバルは油断してた・・・体育祭はすでに休めないことになって
いたことを・・・

「うんとさ……スバル君の出る種目がね……」

ミソラは言いすらそうにしてる、いやな予感がするスバルは問い詰める

「僕の出る種目って何？200m走は全員じゃないっけ？他にあるの？」

ここでミソラは、こつちを見た、笑いながら

「スバル君の出る種目……全部だよ」

スバルは理解できなかった、ミソラは続ける

「出れる競技全部エントリーされてるから、頑張つてね♪」

スバルの時間が止まった、スバルの脳内は激しくそのことを理解しようとした

[illegible]

理解しようとしたが理解できず叫んでしまう

「私も張り切って弁当作るわ、ミソラも手伝ってくれる？」

「はい、スバル君楽しみにしてて♪」

スバル以外の人で着々と準備が進められる

「まってよ、全部ってうそでしょっ！なんでばくがつ！」

「なんでって・・・」

予想はついていた、ルナ&ミソラの独断による決定！&世界を救ったヒーローというレッテルからのみんなの賛成・・・

「（最悪だ・・・）」

「あ、あとこの競技・・・マラソン、これ一位取ってね♪」

「はい・・・（もうどうにでもなれ）」

「一位の景品が、旅行券なんだよ、絶対取ってね♪」

ミソラの願いを叶えるために狩りだされるスバル、一応世界を救った英雄なんだよ

そして現在にいたる、

「はあ、明日からはマラソンの練習か・・・」

『くっく、残念だなスバル』

ちなみに、ミソラはドラマの撮影のため練習には来れないらしい、
本番は無理してでも来るといつていた

「しかたない、頑張ろう！ロック」

決意するスバルであった

来週までに・・・（後書き）

また明日

感想待ってるよ

地獄の一週間（前書き）

昨日はすみません

&明日テストって最悪・・・

地獄の一週間

〓一日目・日曜日〓

ということでマラソンで一位をとるため、練習が始まった、が

「さて何をすればいいんだ？」

マラソンに出ることを決めたものの、運動なんてあんましないスバル・・・

「そう思っ^て助っ人を読んだわ」

さすがは委員長手際がよろしいこと

「助っ人って？」

と、ここで現れたのが・・・

「ツカサ君！何でここへ？」

「スバル君、久しぶり・・・なんとか、旅は終わったよ」

双葉ツカサ、昔FM星人のジェミニと電波変換してジェミニ・スパークとなりスバルを苦しめた、多重人格を持っており「ヒカル」という名だった。

「そうか・・・ヒカルはどうなったの？」

「ウィザードとして、今は僕の助けになってくれるよ」

『おいツカサ呼んだか？』

「あいさつしなよ、ヒカル」

『わかった、スバル久しぶりに聞く名だな・・・お前が助けをツカサに求めりゃ俺たちが助けてやるから覚悟しとけ！』

まだ戦闘が好きで荒っぽいのは治ってないようだ

「ちょっと！二人とも私のことを忘れないでよ！練習のために集まったんだから・・・走ってきなさい」

「委員長、何でツカサ君が助っ人なの？」

「なぜって・・・あなたに並ぶ我がクラスのエースだからよ」

『エースだつてよ、ツカサ』

「そんなこと言われても・・・僕、陸上部ではないんだし」

結果を言ってしまうと、スバルのクラスにはずば抜けて早い人がいなかったため、マラソンに出る選手を決める際、まあまあ早くてカツコイイという理由でツカサ、ロックマンという肩書でスバルが選ばれたというわけだ（マラソンメンバーは全部で5人だが残りの3人は捨て駒）

「それじゃあスバル君、走ってこよう！」

「まって！・・・ツカサ君、その・・・ぼくとブラザーバンドを結んで下さい」

「いいよ、僕みたいな人でよければ（これで僕の罪が消えるわけじゃないだろうな）」

というわけで一日目はツカサとともに、（鬼）コーチの委員長の下、ぐんぐんタイムを上げて（地獄のような特訓の成果）終えたのであった・・・

～その夜・スバル～

家に帰ったスバル

「あれ？ミソラちゃんは？」

「昨日の夜からドラマの撮影が本格的に始まるから、撮影地のホテルに寝泊まりするって」

「へえ、そうなんだ（そういえば家にいなかった）」

「あれっ、スバルはミソラがなくてさみしいのかな？」

「ちっ違うよ」

顔を真っ赤にするスバル、これではスバルがそう思っただけでも肯定してるようなものだ

「ふふふふっ、そうなんだ若いわねスバル」

「違つて!」

さらに真つ赤に、ロックがさらに追撃する

『さみしくないって言つてたつてミソラに言つちゃおうかな』

スバルに逃げ場がなくなる

「・・・さみしいです(何でこんな恥ずかしい目に)」

そんなスバルだった、一方のミソラはというと

「ふう・・・つかれた・・・」

ドラマの撮影の今日の分は無事終了したところだった、とここで

「ミソラちゃん、今日の縁起上手かったよ」

「はい、有難うございます・・・って、あなたは誰ですか？」

そこにいたのは、見たことがないがすごくイケメンの役者だった

「あ、すまねーな 自己紹介が遅れた、うん・・・俺は 切咲

絆 (きりさき きずな) 今日からロケ入りした、このドラマの主演で、君の恋人役さ。」

「あ、はい、宜しくお願いします(雰囲気スバル君に似てる・・・なんでだろ?)」

「はははっ、おう、宜しくな!それじゃっ今日はここまでで・・・

それとも一緒に食事でも行くか？」

年齢的には高校生ぐらいだろうとミソラおもった、魅力的だが、ミソラはスバル意外見えていない

「済みません・・・これから用事があるので」

「そっか、まあ今度な。それじゃ何かあったらメールしてくれ」

「さようなら絆さん」

『（あの人のオーラがすごい・・・なんだろ）』

そして帰った絆だった

（闇の組織）

「ブラック、マドローが見当たらん・・・やつはどこに行った？」

やけに焦っていた、それもそのはず、ハイドとともに主力の一人が来ないのだから

「ふっ、大丈夫だ、やつは電波変換できんからロックマンにやられることはない」

やけに安心しているブラック、さすがはボスというところ

「やつは目的を果たすまで帰ってこないだろう」

「ハイドとやらは？裏切りもあり得ます・・・」

「つつつぶ・・・大丈夫だ、心配いらない」

「しかし・・・」

「トートよ、やつの冷酷さはお前も十分わかっておろう・・・あんなあいつが、甘ったるいロックマンにやられるとでも？俺は絶対ないと思っている、お前も焦っていたら足をすくわれるぞ」

「はっ！了解です・・・（まだ心配が残るが・・・）」

トートは、何かの作業でコンピューターの元へ、ブラックはいすにどかつと座り一人考えていた

「（しかし、何故マドローは自ら動くと言ったのだ・・・やつの性格からいって、人を使うと思っていたのだが）」

（練習二日目）

【ここからはだいぶ短縮します】

「はい今日は、スバル君、野球部のようにタイヤを引きながらツカサ君のスピードについて行って」

「鬼！？」

「（キッ！）やるわよね・・・」

「（オーラがこわいよ）はい・・・」

そういうことで、スバルは死にけるぐらい全力で走って、練習
二日目終了

～三日目～

「スバル君、今日はタイヤふたつつね」

と、笑顔で言うルナのオーラは、スバルの意見を認めない雰囲気

「はい・・・」

「（スバル君も苦勞してるんだね）」

『（そうだな、ツカサ）』

また今日も地獄を乗り越えたスバルしかし・・・

～四日目～

「今日はタイヤ5個」

～五日目～

「今日はツカサ君の二倍の距離でタイヤ三つ」

～六日目～

「さあスバル君、明日は最終トレーニングだけでいいから今日は4
2・195キロ走ろうか？」

「ははああい」

スバルはもはや死人のごとく返事もままならない、しかし確かに力をつけてきている

・・・・・・そして・・・・・・

「ぐは、ゴールした・・・タイムは？」

「4時間と10分・・・一位には程遠いわよ」

「ツカサ君は？」

「3時間39分、差がすごいあるけど・・・どうしてくれる？」

「はあ・・・明日の調整で何とかするよ」

というわけで（後半カットしすぎやろ）スバルの地獄は終了した

↓最終日↓

最終日は軽く走って、ストレッチをした、夕食はカツをたべて気合を入れた

「しかしスバル、一週間でたくましくなったな」

「父さん、そんなに？」

「ええ、すごくたくましくなったわよね大吾さん」

「ああ、スバル、後は自分を信じて頑張れな」

「うん！」

なぜかスバルは、自信がついていた、実は昨日ツカサとのレースはだいぶ手を抜いていたのだ、更に疲労が回復したのを考えれば、時間半を切ったタイムを出せる、そう考えていた

「あ、メールだ」

「スバル君、明日は決戦だね」私も練習に付き合いたかったけどごめんね・・・スバル君が一位で帰ってくるのを信じてるからね」

「ミソラちゃん・・・」

「へっ、これで一位を取れなかったら・・・恐ろしいだろうな」

「だいじょうぶ、っていつでも・・・無理があるか？」

「でも俺まで練習に付き合わせたんだから勝てよ」

「ロツクは負けず嫌いだからなあ、これも負けたくないんですよ」

「おっ俺は関係ねーよ、お前の問題だろ」

スバルは思う、これも、このマラソンも自分だけじゃここまで来れなかったと、みんながいたから、つらくても頑張れたんだなあ

「よし、まだ八時だけど寝よう、おやすみ！」

『
おう
』

眠りに入っ
たスバルだ
った

地獄の一週間（後書き）

今日はここまで

感想送ってください

マドレーラの二計（前書き）

今日もこれしか更新できません・・・

マドーラの二計

「闇の組織」

「ツクツク、ハイドよ、失敗に終わったなこの前は・・・」

ここはブラック達がいる場所ではなく、マドーラが居座るノイズウェーブ

「はっ、まさか私を見ごにあすけるとは、マドーラ様の脚本どおりにはいきませんでしたね」

「ふ、まさかあの爆弾を解いて見せるとは・・・」

「回想・マンション爆破の前のくだり」

「見苦しいなハイドよ」

ロープをはおり、十字架の仮面の男は言った

「なっ、マドーラ・・・様、なぜここへ」

「おい、俺の取ってこいといった品は・・・」

「（まずい忘れてた・・・くそっ）次は必ず取って「バン！」」

「お前は用済み・・・でもまだ使えるな」

というマドーラという男はハイドの髪を一本ぬきとった

「ぐっ、何をする」

「ふっ、人形劇を始めるだけだよハイド君・・・」

男はほほ笑んだそして、糸のようなものを巧みに動かしていく

「まっまさか、それは・・・」

「そうさ、これは<電波の糸>私が発明した、電波変換したものを操れる」

「私に何をさせるつもりで？」

そう聞くハイドに瓶に入った液体を見せる

「それは？」

「ふふふ、私の発明品、これで死んだ電波をよみがえらせる・・・」

仮面の下で不気味な笑みを浮かべるマドーラ

「それで、何をすればよろしいのです？」

「なんてことはない、この爆弾で自爆・・・やつを道ずれにしてな」

「なっ・・・」

ハイドはたじろぐ、自分に死ねと言っているのだから

「自爆して奴が消えたらお前をよみがえらせる、これでお前の汚名返上だ」

「（この作戦でロックマンに復讐できる）わかりました、このハイド、あなたの脚本に出演して見せましょう！」

「ふ、そうだ条件を付けておく、ロックマンには命乞いしろ。あと、貸しができたって言うっておけ」

「はい？なぜ・・・いやいいです（この人の言うことには意味があるのだろっ）」

という声のトーンを上げて

「別に失敗してもいいから、アドリブはあまりするな」

「はっ、では」

と動こうとするハイドだが、電波の糸で動けない

「動けません・・・」

「わかった行つてこい」

ハイドは無理矢理操られ電波変換させられる、そして、人形劇の人形のようにぎこちなくミソラの部屋へ向かわされて行った・・・

（闇の組織・マドーラの間）

「しかし、なぜあんなことを？」

少し、声を上ずらせて聞くハイドに冷静にマドローは答える

「ふふふつ、この後の計画、お前が言う脚本にかかわってくる」

ここでハイドには疑問が

「その・・・計画とはブラック様のものと違うのです？」

「はははは！奴に俺が従うとでも、俺はやつより上だ・・・簡単にデリートできる、しかしやつと協力という名目で奴を駒として使えば、・・・私の望む力が得られる」

ハイドは思った、この人・・・マドローに会ったときに感じたこいつのオーラがすさまじいものだったのを、そして、今もそのオーラで気絶しそうなくらいだ

「まあ、マドロー様に私はついて行くだけです・・・」

「ふふつ、次は何をしようかな・・・」

二人は闇に消えた・・・

マドレーラの二計（後書き）

感想よろしく

目指せ一位！体育祭！～本番直前まで～（前書き）

体育祭編（戦闘なし）長くなりそう・・・

このペースだと100話超えてしまうかも

まあ、どんどん進めたいですわ！

目指せ一位！体育祭！～本番直前まで～

～当日～

早く寝たため早く起きたスバル、と

「（うーん、よく寝たかな？）ふああ・・・」

『ZZZZ・・・』

「ZZZZ・・・もうパフェ食べれないよスバル君・・・」

『（あらすバル君の起きたのね、ふふふつでも寝たふりしとこ）』

早く起きてしまった・・・とここで気づく

「（何でミソラちゃんがぼくのベットに入ってるんだあああああ
あ！！！！！！！）」

一人パニックになるスバル

「ZZZZ　むにゃむにゃ・・・」

一方のミソラはスバルに抱きつく

「（寝てるとはいえ、これはいけない！！！！）ちよつと・・・」

しかし、ミソラのかわいい寝顔を見ていると起こす気がなくなる
考えれば一週間ぶりの再会だ

「・・・かわいい・・・」

『クスッ、ミソラが起きてれば嬉しがってただろうな』

「ハープは起きてたのか、恥ずかしいな」

「・・・ZZZ・・・」

顔が赤くなるスバル、しかしおかしいのはミソラも顔が赤くなつてるところだ

「・・・ミソラちゃん、もしかして・・・起きてるよね？」

「・・・」

『ZZZ、ガー！ゴー！』

ロックのいびきで静寂は無くなった、これでは雰囲気・・・

『寝てまでG K Y（ガサツ&空気読めない）なの！』

気持ちよく寝ていたロックに、こちらも気持ち良いくらいのジャブからのアッパーを決めるハープ

『グフッ・・・（気絶）』

『それじゃあね、二人とも』

ハープはロックを連れていずこへと消える

「・・・・・・・・ZZZ・・・・・・・・」

「なぐんだ、起きてないなら聞こえてなかったんだな・・・おやすみミソラちゃん」

わざとオーバーリアクションをとって二度寝するふりをしたスバル、ミソラもこの罠には気づかずに

「・・・ねてる？・・・かな」

「はあ・・・寝てないよ」

「わっ、寝たふり！」

「ミソラちゃんいつから起きてたの？」

「パフェの寝ごとのくだりから」

「って最初からじゃん！」

ミソラの演技に、まんまとはまっていたことと、かわいいって思わず言ったのを聞かれたことが恥ずかしいスバル

「ちょ、そろそろ離れて」

さつきから抱かれ続けているのもスバルが照れる要因だ

「私のこと嫌いなのか？」

涙目（演技）でいわれるとスバルに勝つすべはない

「・・・嫌いじゃないよ、好きだよ」

「じゃあ、いいよね」

というわけでかれこれ一時間抱かれ続けたスバルだった

（朝食）

「スバルご飯よ！ミソラもいるんでしょ」

スバルが解放されたのは母の一言だった

「それじゃあいくか、ミソラちゃん」

「うん」あ、そういえば弁当、スバル君が起きる前にお母さんと一緒に私作ったんだ、楽しみにしててね」

スバルは嫌いだった体育祭の楽しみが増えた

「おはよう母さん、あれ父さんは？」

時刻は朝4時、ものすつごく早おきな家族だ

「大吾さん、長官に一週間前からすごく頼み込んで、やっともらえた休みだからって張り切ってもう学校の校庭で待機してるみたい」

「はははっ、（父さんのことだからゴール前の一番いい席に待機してるんだろうな）」

ミソラもここで着替えて降りてきた

「おはようございます、スバル君、後で少し外走ってこない？練習に一回も付き合えなかったし（マラソンにスバル君が出るきっかけを作ったのは私だしね♪）」

「いいよ！じゃ、ごはん食べるか、いただきます！」

「いただきます」

と、ここでウィザードコンビが帰ってきた

『だから、何でアップーする必要があったんだ！』

『さっきも言ったとおりね・・・』

まるで漫才をやってるかのごとき夫婦喧嘩は、スバルとミソラの説得により終了し、その漫才をあかねは面白そうに見ていた

「もぐもぐ、がぶつ、ゴクン！それじゃあ、着替えてくるから待っててミソラちゃん」

「はい」

あかねはミソラが一人になったので突っ込んだ質問をする

「昨日は一緒に寝たの？」

「え、あ・・・はい」

「ふふふつ、頑張つてねミソラ。気を抜くと誰かに取られちゃうかもよ、スバル以外と持てるみたいだし」

そうなのである、意外と顔が整っているスバルは最近では明るく、人気者のため自然と人が集まってくる、昔のスバルとは大違いだ。しかも、欠点だったもやしっ子としてのスバルはこの一週間でたくましく筋肉モリモリのまさに「漢」となったのだ。これからスバルの争奪戦・・・女子による戦国時代が始まることはミソラだって目に見えている。

「私、スバル君をほかの人に取られないように頑張ります！」

ミソラは真剣に決意表明した

「スバルも、こんなかわいい女の子に想われて、幸せ者ね」

そんなことをしているとかが得たスバルが降りてきた

「どうしたのミソラちゃん、母さんも？」

なにも知らないスバル、

「あれ？スバル君いつもの服じゃないの？」

よく見ると、青に白いラインが入ったウィンドブレーカーを着こんでいた

「うん、やっぱり運動するにはこのほうがいいかと思って・・・似合ってるかな？」

「うん！すごくいいよ」

照れるスバル、まあトップアイドルにこんなセリフを言われて心踊らないものなんてめったにいないだろう

「ミソラもあるから、着ていったらいいわ」

そこにはスバルの色違いでピンクのウィンドブレーカーがあった

「えっ！ありがとうございます（スバル君とおそろだ）」

というわけでミソラが着替え終わって出掛ける二人だった、あかねが見たその背中まるで夫婦のようだったという

「（ふふふっ、あの二人もだんだんおとなへと言う名の階段を駆け足で上っているのね）」

妙にうれしそうなあかねだったという

「コダマタウン」

「スバル君、ペース早いね」

「うん、この一週間、（悪魔のコーチのもと地獄のような）特訓に励んできたからね」

というスバルは、昔の運動音痴のスバルとは思えないくらい素晴らしいフォームで走っていた

「ミソラちゃんのドラマはどうなの？」

「順調だよ、すごく出演者の人とか、プロデューサーさんが優しくて。和やかなムードだよ」

このドラマというのが、春のスペシャルドラマで3夜連続で放送されるドラマであり、製作費は映画並みだといわれている

「ふう、ミソラちゃんつかれた？」

「全然だよ（ちょっと限界かも・・・でも我慢しよ）」

「そう言って、演技でしょ。ミソラちゃんの競技もあるから、こころ辺でやめるか」

「うん（スバル君、演技を見破るのがうまくなってきてる）」

といって、一度家に帰ったスバルとミソラだった

（時刻7時半）

家を出るには早い時間だが、今日は体育祭ということもあって、この時間に家を出ることに

「そっいえばミソラちゃん、ミソラちゃんがぼくのうちに住んでるって委員長たち知らないんだよね」

「そうだね、別にいいじゃん、さあ、行こう」

「（いや、僕が血祭りにあげられる・・・）うん・・・」

今日は、委員長グループの迎えが来なくてスバルは死なないで済んだが、これからのことが心配になるスバルだった

「学校・校庭」

「結構本格的・・・ってか、オリンピック並？」

なぜか、超本格的なスタジアムみたいなのをグラウンドに設置している

「（学校の財力がすさまじい・・・）」

驚くスバルと、知っていたかの如く意外と普通のミソラ

「それじゃあ、席に行こう」

因みに、スバル達の組は青組、ほかに赤、白、黄、緑があり全部で5クラスで優勝を競う！

「えへへ、スバル君と隣の席なんだよ」

ミソラの席は前列の右端から2番目で、端がスバル。もちろんこれはくじで決める際にハープに頼んで教えてもらったのだが

「そうなんだ・・・ってか、僕だけ応援とか、クラスの団体種目の練習参加してないんだけど・・・」

そうなのである。スバルはこの一週間、走ることだけをやらされてきた・・・そのため、応援合戦や、団体競技のムカデ競走などは

練習に参加してない。

「大丈夫、私もやってないから（驚くんだろうな・・・スバルくん目立つの嫌いだし）」

何かを企んでそうなミソラ、いつものこと（？）だ

「あら、スバル君早かったのね」

「おつす、牛井パワー全開だぜ！」

「スバル君、競技の情報や計算なら、僕のペディアに任せてください」

三人が一気にきて、更に話が盛り上がっていると、もう開始直前となってしまった

「スバル君、おはよう。今日は一緒に頑張ろうね」

ツカサも登場し、だいたい青組のメンバーがそろつ

「そういえばミソラちゃん、僕の出る競技って何個あるの？」

「え」と・・・

はい！ここで競技紹介、（スバルが出るのは（ス））

1種目目・男子200m走（ス）

2種目目・女子100m走

3種目目・綱引き（ス）

4種目目・障害物走（ス）

5 種目目・ウィザード競技？
6 種目目・応援合戦（ス）

（昼食）

7 種目目・レクリエーション競技（ス）
8 種目目・ムカデ競走（ス）
9 種目目・マラソン（ス）
10 種目目・クラス全員リレー（ス）

「って、後半休みなし！死んじやうよ・・・」

「大丈夫だよ」頑張ってね」

スバルの叫びもむなしく、もう後戻りはできない・・・

「ウィザードもでるのがあるみたいだな」

「ドッジボールをやるらしいわ」

「フンツ、俺のロケットナックルで敵を粉碎してやる」

いや、ヒカル君・・・それは反則だよ

「俺も腕が鳴るぜ・・・」

『でるのは私とジェミニとMrガサツとオックスだったわよね』

全員宇宙人って卑怯な采配

『ブロロロ！！！絶対勝つぜ！！！！』

なんかめっちゃ団結するウィザード（宇宙人）たちであった

目指せ一位！体育祭！～本番直前まで～（後書き）

感想よろしく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4615z/>

流星のロックマン4 ~ A τ λ α ν τ ?? mystery ~

2011年12月24日13時46分発行